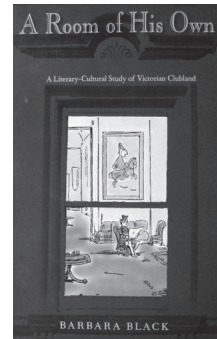
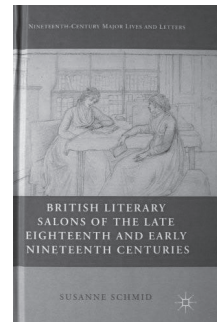


書 評

Barbara Black J, *A Room of His Own: A Literary-Cultural Study of Victorian Clubland* (Athens, Ohio: Ohio University Press, 2012)



Susanne Schmid, *British Literary Salons of the Late Eighteenth and Early Nineteenth Centuries* (New York: Palgrave Macmillan, 2013)



目野 由希

標記の二冊の研究書は、「女性と異文化を排除して初めて成立した、大英帝国のクラブ文化史」(Barbara Black 論文)と、「女性と異文化理解を中核に据えて初めて成立しえた、十八世紀～十九世紀のロンドンのクラブ文化史」(Susanne Schmid 論文)という、方向性の大きく異なる理解を、もっとも大きな主題のひとつとして取り扱いつつも、いずれもイギリスのクラブ文化史の歴史を実証的に論じたものである。

後述するが、両書の見解に相違が生じている理由は、著書のいずれかの見識が未熟だったためでも、いずれかの議論に大きな欠点があるためでもない。

研究者側ではなく、イギリスのクラブ文化の側に、もともと複雑さと矛盾をはらんで成立・継続・発展した歴史的経緯があり、そして、このような複雑さと矛盾が動力源となって活性化・再編を繰り返してきた現実があったからこそ、クラブには、現在まで研究対象となりうるほどの強い魅

力と影響力があるのである。両書の主張、またその歴史的背景を比較検討すれば、それはおのずと明らかになる。

現在の文化研究や文学研究、英文学批評の水準を鑑みれば、「他国にはありえないイギリス固有の文化的特徴」を、他の欧州各国や植民地との相互の影響関係を無視して論じるなどというのは、よほどナイーブでなければ無理であろう。そもそも「イギリス」とは、いつの、誰にとっての、どんな地域を指しているのだろうか。

かといって、二〇世紀までに成立したクラブ文化史について考察する際に、Englishness を無視して議論するなど、ほとんど不可能だ。そこで、同じ主題を考察した実証的な学術書でも、この点についての矛盾が生じるのは、むしろ当然といえよう。

では、大英帝国のクラブ文化の担い手を女性とするか、男性のみで構成されたものと解釈するかについての問題はどうか。

この点は、両書に限らず、他のイギリスのクラブ文化を論じる研究書でも「いつの時代のどのクラブを、論者が主要な研究対象と評価して議論を進めたか」によって、大きく変わってくるようである。

イギリスにおけるクラブ文化のなかの女性、また女性が重要な役割を果たしたクラブ（クラブというより、どちらかというフランスやイタリア等のサロン文化に近似）が、invisible な存在であったという面も、確かに否定はできない。例えば、*British Literary Salons of the Late Eighteenth and Early Nineteenth Centuries* が何章も割いて論じている Lord and Lady Blessington のサロンないしクラブ、またそこでの Lady Blessington が、英国内外にいかにか多大な文化的・文学的・政治的影響力や外交能力を発揮したかは、看過できるものではない。彼女の業績の詳細はともかく、英国史や英仏・英米関係史に興味のある者なら、専門の研究者でなくとも、彼女の名前だけはどこかで聞いたことがあるかもしれない。Susanne Schmid 論文は、欧州や北米との影響関係の網目のひとつとして生成された十八世紀～十九世紀のイギリスのクラブ文化史を、イギリスの資料だけではなく、ドイツやフランスの資料を頻繁に引用しながら、国際性豊かに綴っている。

Susanne Schmid 論文のもっとも着目すべき特徴は、フランスのサロン

の歴史的展開とそのイギリスへの積極的な移入がなければ、そもそもロンドンにはクラブなど形成されなかったこと、十八世紀から十九世紀イギリスに、「グランド・ツアー」文化がなければ、Lady Blessington のような人生も成立しえなかったとの指摘などである。イギリス史だけを追っているはなかなか気づけない事項が、適切かつ高い水準で示されるのだ。

川北稔編『結社の世界史 4 結社のイギリス史——クラブから帝国まで』（山川出版社、2005）中の川北稔「開かれた社交・閉じられた社交 コーヒーハウスからクラブへ」、また川北に限らぬコーヒーハウスについての論考では、イギリスのクラブ文化の主たる淵源を、コーヒーハウスとみなしている。この先行研究は間違いではないが、コーヒーハウスはあくまでもクラブ成立の要因のひとつだ。こうした先行研究を意識しすぎ、コーヒーハウスの存在感の高さや、その利用者のホモソーシャルな関係性など、十九世紀クラブ文化にも確認できる特徴ばかりを見出していくと、視野狭窄に陥ってしまうだろう。

コーヒーハウスもイギリスの国際性を示す一事例であるが、欧州との関係性を見失うと、Englishness を作り上げてきた、より複合的で国際的な環境を見誤ることとなる。

ただし、当時としてはスキャンダラスな Lady Blessington の人生の軌跡を踏まえ、ロンドンの authentic な同時代人が彼女とどういう付き合い方をして、彼女をどう評価していたかの観点からイギリス史を把握し、そこを背景として議論を進めていく場合、Lady Blessington の名前は invisible となる。

実際、彼女のクラブを、場末の外国人向け、クラブとしてはつまらぬ、格式の低いものとして評価するのは、論者が同時代性を意識して一次資料を収集して共時的な考察を行うのであれば、特に不自然な話ではない。

Barbara Black のような、イギリス人ではない女性研究者が、アイルランド出身、イタリアについての著書を刊行し、フランスやアメリカと重要な文化的・政治的交渉を行った才能ある女性とそのクラブを研究対象としない観点を、*A Room of His Own: A Literary-Cultural Study of Victorian Clubland* で採択している。これは一見、ホモソーシャルなイギリスのクラブ文化の、男性中心主義を批判的に、かつ歴史的に論じようとしたはず

の女性研究者が、結果的に、女性と異文化理解の排除を推進してしまったかのように見えるかもしれない。

しかし Barbara Black 論文で評価すべきは、ヴィクトリア朝の〈イギリス〉——植民地インドやロンドン——で、クラブ文化がいかなる文化形成に寄与し、また寄与されたか、また数多くの英文学作品やその作者、現代のソーシャルクラブ文化にまでいかに影響を及ぼしたかについて歴史的記述を行った、イギリス史全般に向かう広い視野、英文学の遺産の豊かさなどにある。

Barbara Black は、まず前掲書の第一章 *A Night at the Club* において、Brooks Club, The Reform Club, The Athenaeum, The Garrick Club, The Travellers Club, The Oriental Club と、歴史ある名門クラブの成立、立地、現状などを十全な資料的な裏付けで概説し、その後の同書の議論を導く端緒としている。これらクラブの史的な重要性を鑑みれば、同書の綿密な資料調査の貴重さ、後学の研究者たちへの大きな貢献は、疑うべくもない。

これらクラブがイギリスの文化史に及ぼした影響を考察する Barbara Black は、クラブを介して醸成される男性同士の絆、フリーメーソンとの共通項と相違、外国人と女性を排斥した文化的コンテクストなどに言及し、論をまとめてゆく。過不足ない叙述と議論の手際は素晴らしく、読了した読者に大きな満足感を与える。

Barbara Black 論文の前年に刊行された Milne-Smith, Amy. *London Clubland: A Cultural History of Gender and Class in Late Victorian Britain*. (New York: Palgrave Macmillan, 2011) でも、この論文と同じようにジェンダーと階級のバランス、歴史性や Englishness を強く意識した議論がなされていた。本書はこの Amy Milne-Smith をより進化させ、一次資料とさまざまな最新の研究動向を反映させるのに成功した。

A Room of His Own: A Literary-Cultural Study of Victorian Clubland の議論がいかに実証的かは、Introduction から第三章までのクラブの説明に、どれほど同時代の一次史料の調査結果をうけた数字ならびに図面の提示がなされているかを見れば、一目瞭然である。Barbara Black 論文は Englishness とイギリス史を、クラブ文化を軸として総合的に理解していくことに、もっとも関心を示している。参考文献の選択の特徴が両書で異

なるのも、こうした両者の研究傾向の相違から来ていると考えられる。

また同書は優れた研究書でありつつ、Facebook やツイッターと十九世紀のソーシャルクラブの同質性を指摘するなど、英文学者以外の読者をもひろく受け入れる懐の広さも備えている。

両書の目次は、以下の通りである。Barbara Black による *A Room of His Own* は、以下の章から構成されている。読者は本書で、クラブ文化の香りをまとった、数多くの英文学の世界を再認識・追体験することとなる。

Prologue

Introduction The Man in the Club Window

Chapter 1 A Night at the Club

Chapter 2 Conduct Befitting a Gentleman *Mid-Victorian Clubdom and the Novel*

Chapter 3 Clubland's Special Correspondents

Chapter 4 Membership Has Its Privileges *The Imperial Clubman at Home and Away*

Chapter 5 The Pleasure of Your Company in Late-Victorian Pall Mall

Chapter 6 A World of Men

An Elegy for Clubbability

Epilogue A Room of Her Own

Susanne Schmid 論文は、主に以下の八つの大目次から構成されている。本書のように、フランスやイタリアとイギリスの文化交流だけでなく、ドイツの思想潮流まで参照したイギリスのクラブ文化史の研究書は、他に類書がないのではないだろうか。

- 1 Tradition and Theories
- 2 Mary Berry and Her British Spaces
- 3 Mary Berry as a Learned Woman: Out of the Closet
- 4 Holland House and Lady Holland
- 5 The Holland House Set

- 6 The Countess of Blessington as Hostess
- 7 The Countess of Blessington as Writer and Editor
- 8 Epilogue

Black 論文では、十九世紀ロンドンの Clubland が男性性とホモソーシャルな紐帯・英国の文化編成・再編成をなし、二〇世紀初頭に到って、女性や外国人の台頭と共に衰亡すると論じられている。

Schmid 論のもっとも着目すべき取り組みは、論じる対象を、文学的かつ十八世紀後半～十九世紀初頭の英国の salon と、Black より狭く限定して、このようなクラブ文化の固定的なイメージを覆そうとしている点にあるだろう。そして本書は、この野心的な試みに成功したとよい。

Schmid の言に従えば、当時の英国の文学サロンはフランスに範を取ったか、少なくとも比較すべき対象である。また彼女は、英国女性の bluestockings の伝統の淵源をクラブ（サロン）にあると指摘し、ドイツとも比較する。著者は、研究対象たる英国 Clubland のみの観察から、ミソジニーを発見するのはフェアではないと、他国との比較から論述していくのである。

その意味では、こちらの方が対象とする時代は早いですが、むしろ *A Room of His Own* の後に読んでみるとよいのかもしれない。

両書とも、充実した参考文献リストと注、論理的な構成を備えている。今後のヴィクトリア朝文化理解に必須の研究成果だろう。

過去から現在までの長期にわたって、世界各国の人々を魅了し続けるクラブ文化。今後、研究者がイギリスのクラブ文化を議論するにあたっては、この対照的な主張をもつ文献の両方を把握しておけば、複眼的でリアリティのある歴史理解に、少しでも近づけるのではないだろうか。